

見てみよう！歴史災害記録と旬のあいち

発!

October

October 2025 vol.138

S	M	T	W	T	F	S
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

◆指月院観音堂（身代わり地蔵）

所在地：静岡県浜松市中央区舞阪町舞阪

交通：JR 東海道本線「舞阪」駅 西約 2km

嘉永 7(1854) 年に発生した安政東海地震では、伊豆半島から熊野灘沿岸、山梨・長野・滋賀・福井・石川まで広い範囲で強い揺れが発生し、伊豆から伊勢志摩、熊野灘にかけて、沿岸部では津波により大きな被害がもたらされました。浜名湖周辺は津波の常襲地帯であり、明応 7(1496) 年の明応地震で浜名湖の今切口が切れ海とつながったとされ、以後、東海道は今切口を船で通過する必要が生じ、渡船場として、東の舞阪、西の新居に宿場町が栄えました。安政東海地震における新居宿の被害は以前に紹介しましたが（vol.119,2024.3 月号参照）、同様に今切口の東側の舞坂宿でも、大きな被害が発生しています。

安政東海地震により津波に襲われた舞坂宿周辺では、海岸の石垣が崩れ落ち、西側の渡船場などから入り込んだ水が家屋を破壊しました。渡船場付近の角屋（旅籠屋、以下同）は鴨居の上まで水が来たとされ、湊屋、笹屋、桔梗屋は裏から水が入り半壊するなど、家屋の流失 8 軒、全壊 8 軒、半壊 58 軒に及んだとされています。また、渡船場の石垣が崩壊したことにより航行に支障が出たほか、道路が押し流されて通行できなくなった箇所もありました。

安政東海地震の舞阪の様相については、当時の状況を克明に示した絵図が残されています。（絵図は浜松市博物館所蔵。https://www.sonpo.or.jp/report/publish/bousai/yobou_jihou/pdf/ybja_ez/ybja-ez-136.pdf もご参照ください。）絵図を分析し、現在の舞阪の町との比較などを試み

た論文『古絵図に基づく安政東海地震の浜名湖周辺における津波浸水域の分析』（蝦名他、2020）によれば、指月院が床上まで浸水していたこと、岐佐神社は門前までの浸水であり、津波からの避難場所になっていたこと、金山神社や一里塚が浸水境界となっていたこと、白玉稻荷神社が島状に浸水を免れていたことなどが、絵図から読み取れます。

地震に伴う津波により、宿場町を始め、浸水の被害が発生した舞坂宿ですが、住民が高台に避難した結果、津波による死者は一人も発生しませんでした。絵図にも登場する舞坂宿本陣裏の指月院には、一体の観音像（十一面観世音菩薩立像）が祀られていました。高さ 75cm、身幅 20cm、檜の寄せ木造りでできたこの観音様は、安政東海地震の津波で壊れてしまいましたが、舞坂宿で死者が一人も出なかったことから、観音様が身代わりになってくれたものと伝えられ、以後「身代わり観音」と呼ばれて、大切にされました。壊れた観音様は、安政 4(1857) 年に修理に出され、明治 42(1909) 年に指月院が廃寺となった際にはこの地を離れますが、昭和 14(1939) 年に再興された折に細江の宝林寺から迎えられ、現在では当地の観音堂に祀られています。



指月院観音堂

写真提供：
（一社）中部地域づくり協会
（2014 年 2 月撮影）

中部災害アーカイブス「地震・大津波の痕跡、教訓から学ぶ」の記事（http://www.cck-chubusaigai.jp/jishin_syousai.php?id=28）もぜひ併せてご覧ください。



◆災害にまつわる碑や史跡には、実際にその地域で起こったことが記録されているだけでなく、当時の人たちの思い（二度と被害を繰り返さないように、など）が込められています。碑や史跡の前では、災害が実際にこの地域で起こるということを実感していたくとともに、そうした先人たちの声に耳を傾け思いを巡らせ、身の回りの備えにつなげ、これからの防災に活かしてください。

◆見てみよう！歴史災害記録と旬のあいち バックナンバーから

●大光院 (vol.87,2021.7)

所在地：蒲郡市西浦

交通：名鉄蒲郡線「西浦」駅南約3km

蒲郡市の西浦半島は、西尾市幡豆との境界に近い三河湾に突き出た半島で、先端には、三河湾が一望できる風光明媚な温泉街、西浦温泉があります。マリンスポーツや海釣りのメッカとして知られるほか、形原港から西浦温泉にかけて海岸沿いを走る西浦シーサイドロードは、椰子の木が植えられ南国ムード満点で、ツーリングやドライブに人気です。蒲郡市出身の漫画家・俳優の大橋裕之さんの原作漫画を実写映画化した「ゾッキ」のロケ地にもなりました。

西浦半島の先に、松島があります。いまは防波堤で陸続きとなった松島には、かつては数多くの松の木がありましたが、嘉永7(1854)年の安政東海地震による津波が襲い、松の木の大部分と、島に祀られていた地蔵菩薩が流されて

しまいました。安政東海地震では三河湾内にも津波が襲い、蒲郡市でも中心部や西浦で2mの津波が到達し、人的な被害は少なかったものの、一部家屋や田畑に被害を及ぼしたとの記録が残されています。蒲郡市誌などには、西浦では高さ2mの津波が松島を打ち越して、5軒の家に海水が入り、住民は屋外に小屋を建てて寝た、との記録があります。

地震後、松島の地蔵菩薩は、改めて新しく建立され、再び松島に安置されました。一方、流された初代の地蔵菩薩は地域の人々に変わらず厚く信仰されていました。その後、地元の漁師により、その一部が地引網などによって引き揚げられ、やがてすべてが復元されました。復元された地蔵菩薩は大光院に移され、現在は入口の石段に鎮座されています。



◆詳細は、見てみよう！歴史災害記録と旬のあいち vol.87 (<https://www.gensai.nagoya-u.ac.jp/rekishijishin/geppo.html>) をご覧ください。

★舞阪大太鼓祭り

舞阪町では、町内安全と海上安全、豊漁を祈願し、毎年旧暦の9月14日と15日に、舞阪大太鼓祭りが行われます。(2025年は11月3日(祝・月)、4日(火))祭りは岐佐神社の祭典として執り行われ、400年以上の伝統があります。

一日目の宵祭りでは、大太鼓をつけた屋台と手踊りが町を練り歩いた後、岐佐神社に大太鼓を運び入れます。二日目の本祭りでは、神輿と大太鼓が神社から稲荷山へと向かい、夜にはまた神社に戻ります。



IN HAMAMATSU.COM HP より

大太鼓は明治中頃は直径2尺(約61cm)、大正時代は4尺(約121cm)ほどでしたが、現在では、大きいもので直径2.5mもあり、神社の鳥居を通り抜けるギリギリの大きさです。神社の5mほどの階段を神輿と大太鼓が昇り降りする光景は迫力があります。

～宿場町を巡る～

舞坂宿は、東海道の江戸・日本橋から数えて30番目の宿場で、今切の渡船場として、旅人たちににぎわいました。



photo AC より

湖岸には雁木(船着場の階段状の構造物)が3か所あり、大名や幕府要人が使った北雁木が現存しています。

また、天保9(1838)年に建てられた脇本陣建物や、宿場の入り口に設けられた見附石垣も残されています。

●ブレイクタイム●

♪舞坂宿脇本陣

脇本陣は、大名等が本陣で宿泊できない時に利用された施設で、普段は一般の旅籠屋でした。舞坂宿脇本陣「茗荷屋」は、天保9(1838)年の建築とされ、上段の間があった書院棟が、旧東海道宿駅の中では唯一の脇本陣遺構として残されています。平成9(1997)年には解体修理が行われ、現在は公開されています。本陣と格を合わせるために採用された畳廊下や屋根付きの玄関、再現された台所や風呂場、防犯のための急な階段などから、当時の生活の様子をうかがうことができます。



photo AC より

◆この地域の災害に関する碑・史跡、資料・体験談集、地域に残る古文書、研究資料、郷土史研究者・団体などの情報がありましたら、gensaisan2014@gmail.com まで情報をお寄せください。

◆この地域の歴史災害記録をオンラインツアー形式、マップ形式で紹介しています。各地の碑や史跡等にご興味をお持ちいただけましたら、『災とSeeing』のホームページ (<https://www.saitoseeing2020.jp/>) をぜひご覧ください。

(発行：減斎の会・名古屋大学減災連携研究センター 2025年10月)